失われゆく延喜式内社を求めて【第10回】

神が求めれば、運命は転じる

～10年で事業再生！葛木御歳神社の奇跡～〈後編〉

青年版国民栄誉賞〝人間力大賞〟受賞者　オキタリュウイチ

地域の過疎化と老朽化が進むなか、たった10年ほどでゼロの状態から神社を再生させた事例として葛木御歳神社が注目を集めています。産経新聞、毎日新聞や「日経スタイル」「関西ウーマン」などのWebメディアに特集された背景には、この奇跡の事業をたった一人で成功させた女性宮司、東川優子さんの並外れた行動力がありました。前回に引き続き、同社が実践している新時代における神社復興のための手段、未来ビジョンを探ります。

資金ゼロからのスタート、ネットでつながった所縁

オキタ／前回は、東川宮司が古社の管理を担うようになった経緯に加え、インターネットを介して広がった人々との不思議なご縁についてお話いただきました。今回はこれまで実施された財政面での打開策、および神社経営のグランドデザインに関する、より具体的なお考えをお伺いしたいと考えております。もともと金銭的に過酷な状況からのスタートでしたが、経済的な事情はどのように克服していったのでしょうか？

東川／私が神社を引き継いだ当初は、全くお金のない状態でして、資金ゼロ円から始まりました。お金が無かったので、しばらくは人海戦術で、竹を切って手水舎にするなど、お金をかけなくても出来ることをしました。ただ、そういった活動だけでは限界がありますので、より広がりをもてるような新たな手段を開拓する必要がありました。

そこで、季節ごとの行事を増やし、人を呼び込むことを積極的に行ったのです。

私が神主を引き継いだ当初は、正月祭り、御田祭り、秋祭りのみ執り行っていましたが、御歳神は〝稲の神〟であり、もともとは農事の初めに五穀豊穣を祈願する祈年祭を重視する神社でしたので、白鶏、白猪、白馬を供える祈年祭を復活させました。祈年祭の次は新嘗祭、夏越大祓式と新たに3つ増やしたのです。しかしながら、行事を増やしても資金が増えることにはつながらず、当然ながら必要予算は増え、運営資金を工面する必要がありました。そこで取り組んだのが「次世代型・崇敬会」の組織化でした。

オキタ／葛木御歳神社は最寄駅（御所駅）から5キロほどの場所にあり、道は細く立地的にも不利ですし、近年は過疎化、氏子の高齢化で深刻な状況に陥っていたため、普通に考えると支持者を集めるのは困難なはずです。崇敬会を組織する際にもインターネットを駆使されたのでしょうか？

東川／その通りです。地域に住む氏子さん方はとても尽くしてくださってますが、この時世、村のお金だけではこの規模の神社を運営していくのは難しい状況があります。そこでチャレンジしたのが、インターネット経由で神社のファンを増やしていく活動です。生き残るためには、村のなかだけではなく外に目を向ける必要があります。インターネットがひとつの有効な策だと思ったのです。

オキタ／ホームページは「作ったら見てくれる」というものではありませんよね。崇敬会のメンバーはどんな手段で集めていったのですか。

東川／後に崇敬会のコアメンバーとなった方々は、もともとネット上で御歳神社に関心をもっていた方々でした。最終的には崇敬会を組織化しましたが、その前にネット上でファンを増やしていく活動を地道に行っていたのです。荒れ果てた状態から、ネットで出会った人々と話し合ってイベント的に手水舎を造ったり、社務所を改装したり、瑞垣を整えたり、摂社を直したり、そういった一つ一つの活動をホームページや神社好きの方々が集まるブログサイト上で逐一、情報発信していきました。私の方からも、あちこちの神社ファンが集まるサイトを探し出してアクセスし、色々なサイトにコメントを書き込みました。いま現実に起こっていること、達成したことをリアルタイムに伝えていくことで、「何か面白いことやってるな」と注目され、コアなファン層が増えていきました。

氏子と崇敬会がひとつになる

そんななか、2008年に新たな取り組みとして新嘗祭を行う際、資金を工面するため、最初に崇敬会への参加を呼びかけたところ、すでに関心をもっていた方々が中心になり参加してくださったのです。

オキタ／私も日々、神社を各方面にご紹介する活動を行っていますが、もともと神社に関わられている方々に対して新たなコンセプトや企画を理解してもらうことに難しさを感じています。神社は公共的な側面もありますから、近隣の氏子さんたちにとっては自分たちの領分であり、余計なことはしないでほしいし、触らないでほしい。崇敬会を組織していくなかで、地域の皆さんとの関係が難しかったのではないでしょうか。

東川／その点は私にとっても一番の難しさでしたね。本当に苦労しました。崇敬会を組織化するに

葛木御歳神社は農耕を司る御歳神（みとしのかみ）を祀る由緒ある神社で、歴史が古く、延喜式神名帳にも名神大社として記される格式を有してきた。

【神社の基本情報】
延喜式内社 葛木御歳神社（かつらぎみとしじんじゃ）
所在地：奈良県御所市東持田269番地
御祭神：御歳神、大年神、高照姫命

東川宮司とオキタリュウイチ。神社裏手、ご神域の入り口に張られた結界にて。
この道を進むと神体山である御歳山、および御歳山を護る奥山にいたる。
（この結界は東川宮司の発案により設置されたもの）

オキタリュウイチ　再生戦略プロデューサー
昭和51（1976）年、徳島県生まれ。早稲田大学中退。行動経済学に基づく経済心理学を独自の手法でマーケティングに応用し、数々の事業再生に従事。京都の老舗米屋をネットで17億の売上にするなど、驚異的な成果を生み出す。同時に社会活動家として、自殺者撲滅や障害者の起業支援を日本財団と共催するなど、社会的課題の解決にも取り組む。

東川優子（うのかわ・ゆうこ）　葛木御歳神社宮司
葛木御歳神社宮司。昭和37年、大阪府八尾市生まれ。奈良女子大学理学部生物学科卒業。大学では環境生物学を専攻。平成16年より葛木御歳神社にて奉職。平成27年、神社横に「サロン＆カフェみとしの森」を開店。神道講座やコンサート、各種勉強会を開催。全国一宮めぐりツアー講師。講演活動も行う。

一番大きなきっかけは、奈良の平城遷都1300年祭のときに、県からの依頼で何かイベントをやって欲しいと言われたことです。これはすごくチャンスだと思い、氏子さんと崇敬会、そこに市役所の方々や、私たちが設立した御歳山整備のボランティア団体の方々を加えた、総合的な「実行委員会」を立ち上げました。毎月会合し、膝をつき合わせて話していくなかで、お互いにどんな考えなのかが分かるようになっていきました。そのイベントは最終的に大成功。氏子さんも喜んでくださり、こういう運営の仕方もあるのではないかと理解していただく契機になりました。

オキタ／それはすごい成果ですね（！）共通の目的を達成することで連体感が生まれ、心がひとつになっていったんですね。

東川／このような出来事を経て、現在は氏子さんと崇敬会、それぞれが協力し合いつつ、それぞれの活動の切り分けが出来ています。すごくありがたいのは、崇敬会の活動が盛んになったことで、氏子さんもますますご協力してくださるようになったことです。

平城遷都1300年の記念の年（2010年）をきっかけに、次々に新しい方々がご協力くださって、氏子さん側で幕を奉納してくださり、崇敬会の会長さんが会社の退職記念に御簾を奉納してくださり、社殿の鈴、摂社など、次々に奉納していただきました。10年ほどかけて行われた平成の大修復のフィナーレとして、御本殿の神様をいったん神饌所に遷座しました。そのときに、氏子さんと、崇敬会の会長さんと、御歳山整備のボランティア団体の方、皆で一致団結してくださったんです。この出来事は本当に感涙ものでした。

オキタ／崇敬会の立ち上げのなかで、困難もありましたが、最終的に全体をより飛躍させるシナジーが育まれた。神社復興のためのモデルとして、この一連の事例は非常に重要ではないかと思います。

神社復興、神社を次世代に残すためのグランドビジョン

オキタ／多くの神社が次々に消滅しているなか、第一段階は十分クリアしていますが、今後こういう風にしていきたいという、現在お考えの神社復興の長期的なビジョンをお話しいただけますか。

東川／神社経営はいま現在も大変ですが、今後、ますます苦しくなると予想されます。神社の活動以外で収入を得ている兼業の宮司さんも増えているのが現状ですが、ある程度、神社単体で経営が成り立たつのが理想。そのために何をしたらいいか、いま考えながら試行錯誤しているところです。

一つ目は神社のサロン化です。先ほど、過去に行われていた神事を復活させるなど、行事を増やしていったことをお伝えしましたが、その他にも、人が来たくなるイベントを積極的に行い、自由なアイデアを盛り込む工夫をしています。古楽器奏者やピアニスト、コーラスグループを呼んでコンサートを境内に併設されているイベントスペースで行なったり、私自身が神道講座を行うなど、毎月、神社の行事とは別に2、3のイベントを必ず開催しています。また、神事自体も、拝殿で能楽を上演するなど、イベント性があるものにしています。神社が今後も長期にわたり存続していくためには、何よりも人が集まる場にする必要があります。そのために、近隣の方々が興味をもつような企画を盛り込んでいくことが重要と考えています。

オキタ／歴史的に見ても、神社はもともと、人々

伝統的なお田植え神事を引き継ぐ「御田祭り」。牛の面をかぶった牛役と田男が田起こしの真似をする。取り仕切るのは、後継候補として有力な東川宮司のご子息。

写真左／能楽奉納、仮面舞奉納、コーラス奉納など、多種多様な催しが拝殿で行われる。

あたり、地域の方々の理解を得るのに4、5年はかかりました。

オキタ／時間がかかるんですよね。具体的にはどのような困難に直面したのですか。

東川／インターネット上でリアルタイムで情報発信すると、若い方々がたくさん集まるようになり、お祭りも手伝ってくれて徐々に賑々しくなっていきました。それ自体はよいことなのですが、年配の氏子さんにとっては神社が自分のもとを離れていく印象があったようです。もともと私自身がこの地の生まれではないので、土地の人間ではない者が宮司を継いで、若い人を引き連れて楽しそうにやっている。「誰の神社なんだ?」という話になってしまった。

大きな失敗もありました。広報のチラシに、新嘗祭の主催元を崇敬会と書いてしまい、氏子さんの心を痛めてしまった。遠方から協力してくれる崇敬会の皆さんへの感謝の思いと、日頃からお世話になっている氏子さんに対しての恩義がそれぞれあり、バランスを取ることに難しさを感じました。

オキタ／新たな組織として崇敬会を立ち上げる背景に、様々なご苦労があったのですね。最終的に解決はしたのでしょうか。

東川／当初は、氏子さんからお叱りを受けることもありましたが、一緒にイベントを企画して交流の機会をつくるうちに、徐々に崇敬会についてご理解いただき、距離が縮まっていきました。皆で努力していくなかで、「この人たちも真面目に神社のこと好きなんやな」と認めてくださったのです。崇敬会の方と氏子さんが交流する場面を積極的につくるなど、私自身もできる限りのことをしました。

が集うサロン的な役割を兼ねた場でしたね。縁日は村のビッグイベントであり、近隣の方々の楽しみであったはずです。それゆえ、新たな企画を次々に考え、興味を喚起していくことは、決して浮ついたことではなく、神社の本来に立ち戻ることではないか。当然ながら、時代によって人々の嗜好は変わっていきますから、行事のコンセプトや企画性は、能の演目が時代を経て歌舞伎として再生し、また現代ではスーパー歌舞伎として息を吹き返しているように時代に合わせて変えていく必要があります。そうした展開によって人を集め、神社を活性化させていくことは、何よりも必須なことですね。

東川／二つ目の目標は、御祈祷を増やしていくことです。人々のために神に祈る営みが神社の本義ですが、その活動が行えていない神社が増えているのが残念です。神社の本来的な活動を取り戻したいと考えています。

オキタ／神主もそうですし、僧侶も同様ですが、地域の人々の悩みを聞き、アドバイスすることが本来の仕事であったように思います。いまで言うところの、ニーズに対して最善策を示すコンサルタントのような活動を、寺社は本来行っていたのではないかと私は考えます。御祈祷料（玉串料）としてお包まれるお金は、単純に祈ることへの対価ではなく、悩みに向き合うことへの感謝の気持ちでした。それ故、神主にはアドバイザーやコンサルタントのような役割が期待されているように思えます。

東川／三つ目として、将来的には、祖霊社を建てて、神葬祭を行える仕組みも整えていきたいと考えています。葬儀はいまでは仏教が担っていますが、祖霊信仰はもともと神道的な考え方です。神葬祭（神道式の葬儀）では、故人の一生のストーリーを祝詞に読む場面があります。どこで生まれて、こんな職業で活躍したと、長い巻物のような誄詞（るいし）を読んでいく。参列の方々は「この人はこんなことをやってきたんだな」とあらためて故人のことを理解する。死者としては、自分の半生について話題にしてもらえると嬉しい。また、神葬祭の特徴として、ご遺体から御霊を上げる御霊上げの場面があります。御霊を上げる神様の導きの声を警蹕（けいひつ）と言いますが、その声が神主の口を介して「オー・オー」と真っ暗な中で響き渡る。独特な迫力があり、私も最初に見たときに鳥肌たつような思いをしました。このごろ神葬祭のニーズが高まっている理由として、このような仏教式の葬儀とはまた異なる魅力があるためではないかと思います。

オキタ／日本では仏教式の葬儀が盛んですが、仏教のルーツであるインドでは、遺体はガンジス川に流してしまうため、個人のお墓や位牌は存在しませんでした。お墓を造って祖霊を祀るという発想は、神道や道教の影響ではないかと考えられます。このように、神道、道教、仏教はそれぞれの良いところをそれぞれ取り込み、影響し合いながら、わが国の中で進化してきました。本来性を考えるならば、いいものをどんどん取り入れて使っていこうとする発想自体が日本らしいのではないでしょうか。うまくミックスした何かが出来るといいですね。

東川／お寺には地域の人たちが積極的にお金を出すが、神社にはなかなか出資してくれない現状があります。その理由としてよく聞くのは、お寺にはお墓があるが神社には無いということです。神社はもっぱら正月のときにだけ行くという印象が

葛木御歳神社に将来的に建設される予定の祖霊社を想像して作られたモックアップ（建築模型）。
建設資金の確保のために、2018年秋頃にクラウドファンディングで支援者を募集する予定。※詳細は神社ホームページに掲載

現代人にはある。それは私たち神主にとっては現実を突きつけられるようなショックです。仏教はお墓を造ることにより、地域との関わりを育んできた。祖霊社の設置は、すなわち神社の本来に立ち戻る活動ですが、同時に仏教が実践してきた知恵を見習うことでもあります。御霊を銘板に刻むことで、神社が新たな役割を担えるのではないかと思います。

オキタ／人々の根源的な悩みに応える活動は、切実であるが故に、対価も高いのは必然的なことです。それゆえ、ただ祈るだけでなく、人々の思いに向き合うならば、御祈祷は相応の対価を頂くべきものですし、「死後きちんと弔ってもらえる」という最大にして最後のテーマに向き合う神葬祭、および会社や法人の祈祷もまた、もっと高い料金設定であったり、金額の種類や項目が多様であってよいと考えられます。

神社が経済的に窮地に陥っている原因のひとつに、金銭的な報酬を得ることへのブレーキがあるように、私は以前から感じています。祭祀は神聖なものであり、高額な報酬を得るようなものではないという考えは必ずしも正しいと言い切れなくなってきています。「神社もどんどん儲けりゃいいんだ！」という短絡的な発想は長い目でみると滅びへの道を歩むことにつながりますが、「清貧を貫く」という思想も実は滅びへの道へ歩むことになります。

どういうことか？　すなわち神社護持のため、必要な金額を決めて開示することで「大儲けしようとしているのではなく、年間これだけ必要なのだ」とシンプルに理解してもらうことができます。その予算をあらゆる方法を考え、募り、実行することは決して私欲ではなく、神社運営の仕事の一部だと受け入れて頂きたい。この土地にこういう神が存在したのだということを次世代に受け継いでいくために。

東川／御歳神社は二千年続いている神社ですが、これからの時代のなかで、さらに千年続けていくためには何をどうしたらいいかを本気で考えていかなくてはならない。いまのことだけを見つめ、突発的な花火を打ち上げるだけでは意味がありません。私が引退したあとの時代も、長期的に続けていける取り組みを、長い時間軸で考えていく必要があります。そのあたり、私の力だけでは無理なので、一緒にやってくださる方がいれば嬉しいかぎりです。

オキタ／神社はもともと、ローカルな営みでしたが、インターネットの導入により、地域に関係なく好きな神社を信仰できる時代になりました。広報の手段はもっと多様であってよいし、現代的な価値観に合わせた斬新な企画が立ち上がってもよい。そのように、手段や表現は多様であってもよいのですが、長年にわたって続いている神社の本来性は見失われてはならない。なぜならば、それは地域や民族と結びついた価値の源泉なのだから。

一方で、日本的信仰のルーツにあたる各地の神社を保全し維持していくために、事業として財源をつくり、予算を確保していくことにも目を背けてはいけない。神社をとりまく背景の時代が変わっていくのに合わせて、神社の在り方も最適化していかなくてはならない。そのような意味においても、神社経営のグランドデザインにおける次世代型モデルを体現する葛木御歳神社の事例はひとつの草分けになると私は確信しています。

インタビューより編集構成／石黒壮明